日本の新宗教の組織的展開 ③

天理大学国際学部教授
山田　政信　*Masanobu Yamada*

レシーフェ大都市圏にある２つの天理教会

ブラジルでは天理教会の多くが日系人の集住する南東部（サンパウロ州・パラナ州）に集中している。とはいえ、北部や北東部の日系人が少ない地域にも８カ所の教会が設立されている。今号では、ペルナンブコ州レシーフェ市にある天理教ノルデステ芳洋教会とその部内教会を設立した２人の布教師のライフヒストリーを紹介したい。というのも、これらの教会は、設立以降、教勢をコンスタントに伸ばしてきたことから天理教のブラジル管内で注目され、しかも信者に占める非日系人の割合が高いからである。現在、信者数は２カ所合わせて250名を超える程度だとみられる。伝道庁で行われる修養会で学ぶ信者が毎年おり、聖地ぢばで行われる教会長資格検定講習会への受講生をも隔年程度で送り出している。

レシーフェ市はブラジル北東部沿岸に位置し、サンパウロ市から直線距離で2,500キロ離れたところにある。ブラジル史上、早くからポルトガル人の植民地化が進められ、港で栄えた旧市街地は近年再開発と観光化が進んでいる。熱帯モンスーン気候に属し、大西洋を北から南に下る海流のおかげで年中海風が吹いていて過ごしやすい。2013年現在、世界遺産のオリンダや、イガラスー、アブリウ・エ・リマなどの近隣の町とで人口約400万人の大都市圏を形成し、ブラジルでは第４番目の規模を誇る。

レシーフェ市とアブリウ・エ・リマ市に２つの天理教会がある。この地域における天理教の布教活動は、坂口章司（1933年生、1958年渡伯）と金子初子（1926年生、1954年渡伯）によって始められた。

坂口章司は教会の次男として生まれた。彼は大学卒業後、公務員として働いていたが「広大なブラジルで力を試したい」と大志を抱き、サンパウロに移住した。出発にあたって、上級教会である兵神大教会（神戸市須磨区）の会長から「ブラジルに行くのなら天理移民で行け」と勧められた。しかし、「布教するという強い気持ちはなかったので、修養科と検定講習を受けて天理教の布教師になる資格だけは取って出国した」。そして、移住手続きはキリスト教系の移住者支援団体である力行会の援助を受けた。

坂口は、上級教会長の意を汲んで当初バウルーにあるブラジル伝道庁に滞在し、当時進められていた神殿や付属建物の建築作業を手伝うことにした。献身的な態度が評価され、６カ月後には鋳物工場を紹介してもらい、その後天理教信者が経営する商店に就職するなどして４年間を過ごした。職について坂口は、ブラジルに出発する際に父親から聞かされた「誰かに声をかけてもらうまで、仕事は自分で変えてはいけない」という言葉を頑なに守ってきたという。

1960年に海外移住連合会（現在の国際協力事業団）に現地採用として就職。リオ、サルバドールへと転勤したのち、４年後にレシーフェに移った。新たに開かれたボニート植民地で日本人移住者の世話をするためだった。そこで彼は同じ信仰を持つ金子夫婦と出会うことになる。

金子初子は、戦後、満州から引き上げた夫と愛媛県で結婚。夫のブラジル移住への希望を受け入れて、アマゾンに入植した。当時「緑の地獄」と呼ばれたアマゾンでは食するにも事欠く生活で、そこから逃れるようにして1958年頃ペルナンブコ州の内陸に移った。そこはブラジル人農場主が経営する広大なサトウキビプランテーションで、その付属屋に家族で住み込みながら働いた。そして1962年、ボニート植民地に移ることになった。

坂口・金子の両氏とも、天理教の布教をするためにブラジルに渡ったわけではなかった。しかし、坂口は父親が教会長、金子の主人は熱心な信者だったということから、1965年頃に彼らは信者集団である講を結成することになった。

渡伯後８年間、親に十分な連絡を取らなかった坂口は信者仲間から親不孝を諭され、父が体調を崩していた1966年末（教祖80年祭の年）に初めて一時帰国する。その時上級教会の会長婦人の勧めで見合いをして結婚。そして、「渡伯時には自分で道を切り開くというような偉そうなことを言ったけれども、自分の能力はそれほど大したものではなかった。これからは親父の真似事（布教活動）をしよう」と考えるようになったという。

夫婦でレシーフェに戻った坂口は、すでに所有していた海岸の高級マンションで新婚生活を始めたが、そこをノルデステ芳洋集談所とすることにした。結婚にあたって、将来教会をつくろうという意志を固めたからだという。その後、人に集まってもらうには広い敷地が望ましいと考え、レシーフェ市郊外の丘の上に粗末な煉瓦小屋を立てて生活を始めた。最初の５年間は、電気・水道のない生活だった。

1976年に天理教教会本部では教祖90年祭が行われた。その直前、坂口は９家族の信者から布教に専念してほしいと頼まれた。職についての父親の言葉を思い出し、信者の願いを受け止めて、集談所を布教所に名称変更して布教専従者になることを決意した。その年､15名の帰参者による「おぢばがえり」が実現した。

金子と夫はその時の「おぢばがえり」団参のメンバーだった。おぢばがえりからブラジルに戻った金子夫婦は、他の信者らと坂口を支援して、集談所があった丘の上の土地に布教所に相応しい建物を完成させた。その頃、職場で事故に遭い大けがをした信者が不思議な救済を得るという経験もした。坂口は「結婚するまでは日本人の『世話』はしてきたが、『布教』はしてこなかった」という。日本から帰国して３年間、彼は市場で野菜を売りながら熱心に布教していた金子に引っ張られるようにして、非日系ブラジル人への「おさづけ」（救済儀礼）の取り次ぎに奔走することになる。

兵神大教会が創立90周年を迎えた1979年、ノルデステ芳洋布教所は教会に昇級し、金子の夫はレシーフェ芳洋布教所（1995年、教会に昇格）を設立した。金子は、その頃はまだ「この日本人は、お金のことしかわからない」と揶揄されるほどの拙いポルトガル語しかしゃべれなかったが、夫に「誠真実」の心でやればよいと諭され、背中を押してもらって布教をしていたという。金子夫婦は、ボニート植民地からアブレウ・エ・リマ市に移って養鶏場を経営するようになっていたが、1984年に夫が亡くなり、金子は布教所長を継承して、息子が家業を継ぐことになった。

レシーフェ大都市圏における天理教の活動は、信者のこうした個人的なイニシアティブによって始められ、日本人社会の中で基盤ができた後、ブラジル人社会に広がった。坂口は日本人会の会長を歴任したという経歴も持っている。今後述べる予定だが、同じレシーフェ市内でも、たとえばパーフェクトリバティー教団は当初から非日系人を対象に組織的な開拓布教を行った。また、生長の家の場合には、ブラジル人信者が布教を開始した後、ブラジル伝道本部から講師派遣というバックアップがあった。こうして眺めてみたとき、レシーフェ大都市圏における天理教の布教は組織的あるいは計画的なものだったとは言い難い。信者個人が発心し、自分自身で生計を立てながら独自の道を開拓するというもので、日本国内で行われてきている「単独布教」というスタイルが基本になっている。経済的あるいは人的支援を頼ることなく、ただひたすら「親の声」に生きようとする布教姿勢がそのまま海外でも継承されていることがわかる。